卓　　話

平成 18 年 2 月 14 日

「美濃と朝鮮通信使」

岐阜市歴史博物館
筧　真理子様

「鎖国」といわれる江戸時代に日本を正式に訪問した唯一の外交使節、朝鮮通信使も、近年ようやく少しずつ知られるようになってきました。

江戸時代には、朝鮮王国との日常の外交・貿易関係は対馬藩（長崎県）が担っていました。しかし、国王と将軍という国相互の外交関係を取り結ぶために、おもに将軍の代替わりに日本から招待されて来日したのが朝鮮通信使です。使節一行は、正使を筆頭に、書記や通訳、医者・学者、料理人や水夫まで500人前後で構成されていました。しかし実際には、対馬藩役人や各地の大名の役人、荷運びの日本人などを含めて数千人にはふくれあがります。この大人数が美濃を通った回数は往復で20回にのぼり、大垣に泊まって一泊二日かけて岐阜県を通って行きました。

これだけの人数を接待するための経費と人手、食材の準備、休泊する家の手入れ・明け渡しと道具の調達、町並みや街道の清掃・美化などは沿道住民を中心にして果たされました。また、ふだんは船で渡る木曽三川には特別の船橋（船を並べて固定した上に板を渡した臨時の橋）が架けられましたが、一端これが架かると、河川交通も阻害されました。

こうした負担や不便を強いられながらも、各地の住民にはそれを恨む気配は感じられません。沿道には見物人が群集し、使節の姿は絵画や工芸品などに留められ、祭礼には通信使の服装や楽器をまねた行列が繰り出されました。岐阜県では大垣竹島町と十六村（大垣市）の祭礼が全国的に有名です。儒学・医学を中心とした学問交流も活発でした。

通信使は（日朝の微妙なバランス関係の上に成り立っていた面があるのですが）、江戸時代の両国の安定の象徴であり、庶民にとっては非日常的な「祝祭状況」をもたらす存在だったといえるでしょう。